

## 4 番目の語り手

うさお

白い霧を裂くように後方から強い光がバックミラーに飛び込んできた。屋根の回転灯が廻りの霧を赤く染める。警察の車だろうか。数台の車のライトがまるで蛇のようにうねる。

四速で流していたギアをダブルクラッチで、いきなり二速に叩き込んだ。がごと尻を蹴られる感じで車が前に飛び出していく。パトカーのライトが白い霧の中に沈んで消える。蒼く靄る湖を右手に見ながら蛇行する周回路を時速 100km/h で走行する。気分が高揚してくる。クルージング・ハイだ。

またも遠くから白い閃光の群れが近づいて来る。片手運転に切り替え、後部座席のバックに手を伸ばす。白い紙を 1 枚取り出す。

そこには一行『たくさんの角を持つ蛇の様な怪物が、他の動物を殺して飲み込んでしまう。』と書かれている。別荘に残してきた婦人と友人達の顔がふと浮かんだ。

もうひとつのものをバックの中から取り出した。黒い拳銃だ。手の平に少し余る大きさと、そのままセイフティを外し遊底を引いた。弾丸が薬室に装填された。コックに親指を当てカチッと音がするまで押し下げ固定させた。

ウィンドウを降ろし右手で構えてみたが旨くいかず、バックミラーを見ながら右手を首に巻くようにして後方に向かって引き金を絞った。轟音一閃。周りの音が消えた。

音が戻ってくるには暫らく掛かった。割れたリアウィンドウから冷たい冷気が音を立てて入り込んでくる。後ろの車の光の点が小さくなっていく。

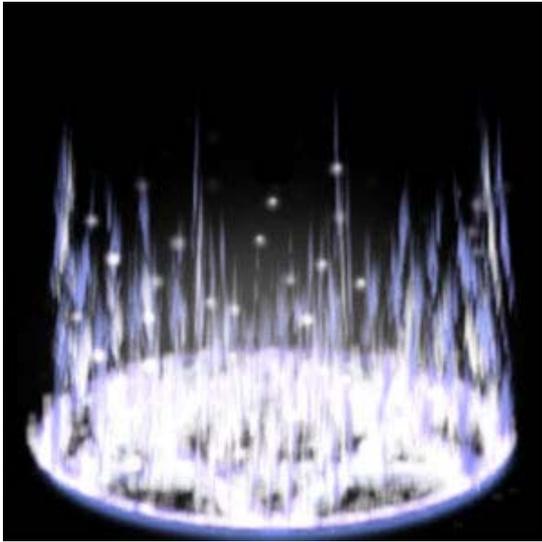
笑い声が聞こえる。それが自分の声だと気づいた。笑っていたのか。このように早く走る車や、四角い拳銃は見たことも無い。見たことも無い拳銃を何故自分は扱えるのだろうか。

昨夜、S 夫人はゼミのメンバーを集めて降霊会を行うと言った。丁度 T 教授が所用で町に下りていて不在だった。

「今日は逗留の最後の 13 日目。今夜面白い体験をさせてあげるわ。でもメンバーが 10 人じゃ足りないわね。そう、11 人欲しいわ。エミリオ、あなたが私の隣に座りなさい。」メイドの娘の顔が強張った。しかし、夫人の声音には反対を許さない絶対的な響きを含んでいた。

その夜、部屋の床にダビデの星を白い砂で描き、その五芒星に接するように円が描かれ、11 人が手をつないで立った。面白い体験って何だろう、すこしエロティックな期待もあった。星の中央には大きな燭台が置かれて、時は二時を過ぎようとする。





突然の靴音が天井から響いた。誰かが床を踏み鳴らしている。だがメンバーはここに揃って居るし、身動きみじろをするものも居なかった。靴音は急にヒステリックに円舞曲を踊るように駆け回った。女子学生の一人が絶叫し手を離して座り込もうとした。

「だめっ！」メイドの娘が叫んだ。

「手を離してはだめ！呑み込まれるわ。呑み込まれるわ。白い蛇が来るのよ。」

「エミリィ！」咎める夫人の声が遠くから落ちてきた。この手のつながりは、まるで蛇のようにうねっている。誰が呑み込まれるのだ？

夫人の声が揺らぐ黄色い光の中で頭の中に響いてくる。

「女の子が泣いているわ。首を吊ろうとしている女も。蒼い湖の中に沈んでいくのよ。神は私に言うわ。誰かが召されなければ・・・神の怒りは鎮まらないわ。」

先ほどの女学生が「いやっ！」と叫び、手を振り放ち両手で耳を塞ぎながら蹲うずくまった。周囲が凍りついた。

S 夫人の眼の中に一瞬、燐光が燃えたように思えた。夫人の眼の色は灰緑色だった。神の鉄槌が落ちるわ。ラップ音のなかでも夫人の低い声ははっきりと耳に入ってくる。

がたっと音がしてキッチンの方から青い光が飛来した。それは先の尖った包丁で、蹲った女子学生の背中に深々と刺さった。私の顔に熱い血潮が降りかかった。私は怖かった。自分をもう抑えることが出来なくなっていた。赤い色は嫌いなのだ。特に血の色は・・・。

かねてからT教授を殺したかった。でも、血のことを考えると気持ちが萎えていた。このときの状況をどう表現したらよいのだろう。脳天を打撃されたように、熱い血の匂いと味に動転した。

そんなときにどうして気づいたのだろう。胸のポケットの重さに・・・それを取り出して見た。箱型の見たことも無い黒光りする拳銃だった。S・Wと刻印されていた。

「おまえ、それは・・・？」Mの声に背中を押されるように振り向いた。不運なことに引き金に指が掛かり銃を撃っていた。恐ろしいショックだった。輪の外に突き飛ばされるようにゆっくりと倒れたのはメイドのエミリィだった。床に女子学生のものとあわせて、二つの大きな血溜りができていた。砂のサークルは流れる血によって分断されていた。降霊会の結界が破れたのだ。

部屋の中だと言うのに深い霧が立ち込めている。

「ザビーナ・・・」私は倒れた女子学生の名を呼んだ。精神こころを病み精神治療を受けているうちに、T教授の理論に傾倒し恋に落ちたザビーナ。彼女の教授への信頼が恋に変わるとき、それを私は胸を焦がしながら見続けていた。だが教授は彼女を捨てた。「君は僕の患者なんだよ。僕の愛は君の病にあるのだ」教授を殺したかった・・・。

S 夫人の灰緑の眼が明るい緑に光りだした。彼女の眼が私に向かった。出ていけと言っている。部屋の扉が音をたてていきなり開いた。

突き飛ばされるように庭に飛び出し、止めてあった車で湖への道を走り出した。そして今は警察の車に追われている。あのような警察の車は見たことも無いが・・・。



ポリフィロの夢

霧が少し晴れて青い月がぼんやり見え始めた。皮肉なもので視界が開けた途端に運転操作を誤り、崖から車輪がはみだすと時間が止まったように湖に向かって落下していった。

湖面に当たる衝撃で身が投げ出された。岸辺の草を掴んだ記憶がある。叫び声を上げると右手が痛い。大きな鉤爪が刺さっている。姿は見えないが何かの獣の爪が手の甲に刺さっているようだ。また、叫び

声を上げる。乳白色の霧がまたもあたりに立ち込め始めた。

気付くと白い壁の病室に寝ていた。点滴の落下音が異常に大きく聞こえる。扉が開き T 教授が入って来るのが見えた。

「済まなかったね。S・W が君に迷惑を掛けたようだ。S 夫人と君らが称しているようだが、あれはヘレーネ・プライスヴェルクと言う私の従妹だ。彼女は幼い頃から霊媒能力が高く、自分でもコントロールできないのだ。彼女を世間から隠すために、この湖のコテージに住まわせている……。ヘレは私のことが好きなのだ。私はその愛に応えられない。私の中に流れる血は、彼女のものと同じなのだ。ヘレは私の心理学の研究に役立てようと、時折、あのような降霊会を行うのだ。彼女の霊能力は本物だが、あれは彼女のシンパシィが君らに見せた幻覚なのだ。」

幻……。覚……。？そうだったろうか？じゃあ、あのポイルターガイストや、エミリィの口から立ち昇ったエクトプラズマは何だったんだ。あれは幻覚なんかじゃない。

教授は私が車の中で開いたバックとそっくり同じように見えるバックを手品のように取り出した。そして洒落た手つきでおもむろに一枚の白い紙を取り出した。幻覚で見た紙とそれはよく似ていた。こう書かれていた。

『しかし四人の神様が世界の四隅からやってきて、すべての死んだ動物を生き返らせる。』※1  
私の神秘学と心理の研究課題だ、はき捨てるように教授は呟いた。

「さて、私と S 夫人とメイドと庭師の四人で全てうまく片付けたよ。うまくね。君は心配することなど何も無い。」

教授は謎のような言葉を呟きながら、ザビーナもエミリィもまったく傷ひとつも無く無事であることを教えてくれた。本当なのだろうか、彼らに会いたいのだが……。医師が来て私に注射を打つと深い眠りに陥った。



眼が覚めると 2007 年 10 月 13 日のチューリッヒの湖畔病院に居た。あの夢は如何見ても第 2 次世界大戦より前のことのようなのだ。あんな理不尽なことが現実に起こるなんてとうてい考えられない。だが気持ちの中の不安感は違うことを言っている。

痛みを右手に感じた。深い痛みの原因は手の甲に残る結構大きな爪跡だった。

ノックの音。日本からの留学生ゆうこさんが「HAIKU」と書かれたノートを片手に病室に顔を見せた。

※1 参照論文「(図解 深層心理が面白いほどわかる本 著者 渡辺恒夫)」